

水木しげる氏

表紙絵

＝寒いから深大寺で甘酒でも飲もうぜ＝

表紙絵：水木しげる

- ・ 私のすすめるこの一冊 2～6
- ・ あんな情報・こんな情報 6
- ・ 第44回 樟まつり-共に生き、共に学ぶ- 7
- ・ 地域ゆかりの歴史・文化・伝統 8



私のすすめる

毎年恒例の皆さんからお寄せいただいた「私の

『やわらか色の烈風』

加賀美幸子著 筑摩書房 <推薦者：三上栄次>

かつてNHKで『朗読の加賀美』の異名を持った加賀美幸子さんの本。加賀美さんの朗読や、ナレーションなどを含む「声」を、私は『耳で飲む味噌汁』と思っております。味噌汁の具材は毎回変化しても、味の根幹である味噌は具材に合わせて変幻自在に適応し、鼓膜にやさしく、聴覚を満腹にしてくださいました。

そんな加賀美さんの書かれました文章は、長年『話のプロ』としてご活躍されただけあって、独特の文体だと感じました。柳の枝葉が揺れる如くの読みやすい言葉の流れは、時に直球、時に変化球、時にスローボールと、言葉を投げ分けながらも、全ての球が読者の胸のストライクゾーンにおさまり、人々の心の支えや参考になることだと思います。

向田邦子さんの言葉は『心で食べる白米』。加賀美幸子さんの声は『耳で飲む味噌汁』。どちらも毎日、心の食卓に……。

『おっちょこちょ医』

なだいなだ著 筑摩書房 <推薦者：石島望咲>

医者がいなかったヘーワ町に、おっちょこちょいなお医者様がやってきた！

歩けば路上のすべてのものをひっくり返し、病名も薬の量も間違えて……。お医者様のおっちょこちょいで起きる騒動が、まわりまわって町を良い方向へ導いていく、ユーモアたっぷりのお話です。

後半になると戦争の影がヘーワ町を覆い、重い空気が住民の間にも広がっていきます。それでもお医者様は変わらずせつせと仕事に励んで、皆を助けていきます。住民も、敵兵も分け隔てなく。

そんなおっちょこちょいだけど、優しくまっすぐなお医者様は、嘘をつけなかったために、最後は敵兵に連行されてしまいます。その時に、悩んでいる青年に向けた言葉が今でも心に残っています。

「ためらうなよ。人をすくって罪になるなら、罪をおかせよ。ちょっぴり、おっちょこちょいになれ。」

子供向けに書かれているけれど、大人になっても気付かされることがいっぱいあるおすすめの1冊です。

『全員少年探偵団ーみんなの少年探偵団ー』

藤谷治著 ポプラ社 <推薦者：中村達彦>

江戸川乱歩生誕120周年記念で、人気の作家陣による「みんなの少年探偵団」シリーズが刊行され、本作はその1作である。

秘宝の首飾りを狙う怪人20面相の暗躍、立ち向かう明智小五郎、小林少年はじめ少年探偵団。巧みなトリック合戦、次また次とどんでん返しが続く。大人の読者も、子供の頃に読んだ少年探偵団シリーズの面白さを感じるはずだ。舞台は現代で、携帯電話やDVDも小道具で使われているが、その一方、昔の少年探偵団や20面相についての新解釈やオマージュも文中に見受けられ、これも楽しめる。

加えて、本の体裁や表紙・さし絵も、少年探偵団のそれを忠実に再現している。

ちなみに物語の重要な場所の1つで、調布市内のある場所が登場し、にやりとさせられるだろう。

「みんなの少年探偵団」は、この本の他にも何冊も出ており、そちらも面白い。昔の少年探偵団と併せて読んでみてはー。

この一冊



すすめるこの一冊」です。今年はどんな本と出会えるでしょうか。

『からすが池の魔女』

E. G. スピア著 掛川恭子訳 寺島竜一絵 岩波書店 <推薦者：井上暁子>

1687年、キットはイギリス領バルバドス島からアメリカコネティカット州に単身でやってきた。祖父が亡くなったため、叔母一家に身を寄せるためだ。しかし、バルバドス島の自由な空気の中で育ったキットには、質素で宗教的厳格さを守ってきた叔母の家での暮らしはなかなか溶けこめなかった。そんな生活の中で、草原は彼女の本能的な感覚をよみがえらせる大事な場所となり、近くに住むハンナとの関わりが欠かせないものとなっていく。

しかし、ハンナはクエーカー教徒だったため、町の人たちからは魔女として敬遠される存在だった。キットの行動はピューリタン社会のしきたりを乱すとみなされ、ついには裁判にもかけられてしまう。

17世紀を舞台にしたストーリーだが、大変考えさせられる内容だ。また、若くやや思慮深さに欠けると思われるキットの行動にハラハラしながらも、最後には自分らしさを見出していく彼女の様子に、読者は深い安堵と大きな満足を得ることができる。

『星に惹かれた男たち—江戸の天文学者 間重富と伊能忠敬—』

はざましげとみ いのうただたか

鳴海風著 日本評論社 <推薦者：長尾敏博>

優れた事跡を残した人物の周りには、又、優れた人がいるものだ。伊能忠敬の事跡はよく知られているが、間重富はどうであろうか。忠敬の師であった天文方の高橋至時と寛政の改暦を成し遂げたことくらいだろうか。大坂の富裕な商人だった重富は、在野の天文学者麻田剛立に入門し、同僚の至時と共に暦学を究めるが単なる学者ではない。技術者でもあり教育者でもあった。測量の器械類を自ら考案工夫したり、又、才能ある人を見出すことにも優れ、例えば後に大坂蘭学の祖と言われた傘職人の橋本宗吉を江戸に留学させ蘭学を学ばせたりした。全国測量を行ったのは忠敬だが、西日本は当初重富が担当する予定だった。高橋至時の死後、息子の景保や忠敬の事業を強力に支援した。知る程にこの様な人物がいたことに驚く。蘭学者大槻玄沢がまとめた漂流記『環海異聞』の解説にも貢献し、「嗚呼、間氏の功、偉也と云ふべし」と賛辞を送られているのも彼の優秀さを物語っている。

『巷説百物語』

京極夏彦著 角川書店 <推薦者：亀田亜希子>

遅読と飽きっぽさにかけては人に引けを取らない私が、本シリーズ全巻一気読みを果たした、その第一段目の作品だ。

江戸の巷で妖怪（あやかし）の仕業と噂されている怪事件を、御行の又一を筆頭とする渡世仲間一行が奇策・奇術を仕掛けて真相を突止める。その展開は、まるで「〇〇！仕事人」のような爽快さだ。しかし、彼らの行動の目的は……。

怪異譚のあるところに又一あり。その人物とは、舌先三寸で人に取り入るのが得意で、まじない魔除け札を売り歩く渡世人。身形は僧形でも全くの無信心。しかし、そんな又一が世の理を明らかにし、救いと許しを請う人々を救うのだ。第一話「小豆洗い」を読み、それに続く「白蔵主」からは時代物推理小説として、のめり込んだ。だが、嬉しいことに、私の推理は完結話まで外れ続けた。

「御行奉為一」（りんーと、鈴の音。）がふと懐かしくなる。

『〈できること〉のを見つけ方ー全盲女子大生が手に入れた大切なものー』

石田由香理著 西村幹子著 岩波書店 <推薦者：斉藤和子>

2008年全盲の石田由香理さんが国際基督教大に進学。この大学は、世界人権宣言の原則に立っていることを知り、大学の先生にメールを出します。学生は入学時、世界人権宣言の原則に立って学ぶことを宣誓します。第1条に「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。」第26条「高等教育は、能力に応じ、すべての者にひとしく開放されていなければならない。」と。

石田さんは3人兄弟の3番目、1才で両眼を摘出し全盲となる。和歌山の盲学校から東京の筑波大学附属視覚特別支援学校に進学。「あんたは目が見えんのやから、どうせ将来ろくな就職先ないんやから、高い金使って大学行っていったい何になる。会社は一流大学を出た全盲より、名もない大学出でいいから弱視のほうを採用するんや。」と全盲の娘を育てた母親の考えに、家族って何だろうか、存在を否定されて悩み苦しみながらボランティアの力を得て学んでいくのです。「この世で最大の不幸は、戦争や貧困などではありません。人から見放され、『自分は誰からも必要とされていない』と感じることなのです」と、マザーテレサは言っています。石田由香理さんはだれもが必要とされる共生社会をめざして努力しているのです。

『朝が来る』

辻村深月著 文藝春秋 <推薦者：銅谷孝子>

「子どもを返してほしいんです」と突然の電話に驚愕する佐都子。特別養子縁組で実子として、夫と共に慈しみ育てている6才の朝斗の生みの母ひかりからでした。

長い不妊治療も苦しく、子に恵まれなかった41才の彼女の腕に抱かれ「朝が来る」と感激に震えさせた嬰兒は、14才の同級生との望まれざる子でした。少女は姉と差別されて育ち、高校中退で家出します。住み込みで辛い労働の仕事を続けていましたが、借金詐欺にあいやクザに追われ、盗みまでしてしまいます。

万策尽きて、子の養い親に子を返さないならお金をとってしまいます。しかし、生みの母でないと自分から言って帰る途中、歩道橋の上で死を考えていた時、覆いかぶさるようにしがみつかれました。佐都子と朝斗です。

作品は、佐都子が「一緒に行こう」とひかりに声をかけたところで終わってしまいますが、ひかりの未来がパッと開けた感動で胸がいっぱいになりました。そして、底に流れている母親達の愛の深さには、はかりしれないものがあると思いました。

『神の国の証人・ブルームハルト父子ー待ちつつ急ぎつつー』

井上良雄著 新教出版社 <推薦者：竹花透>

1927年の芥川の自死を、わが事として受けとめることを強いられた若年の井上良雄は、それから5年後の1932年「芥川龍之介と志賀直哉」（磁場社、昭和7年）という批評文を同人誌に発表した。私はこの批評文の是非を云々とするよりも、あの暗い時代を「如何かして生きねばならない」1人の求道的な青年の精一杯の表現として読むことの方が、はるかに重要なことであると思う。

あれから50年後、井上良雄は同じ線上で『神の国の証人・ブルームハルト父子ー待ちつつ急ぎつつー』を刊行した。本書は神学書ではなく伝記である。伝記でしか有り得ない両ブルームハルトの生そのものに肉迫した「如何かして生きねばならない」1人の求道的な老年の精一杯の表現であると言える。

今日のこの暗い時代を「如何かして生きねばならない」私たちは、本書を真剣に読むべきであると、私は確信している。

『空をつかむまで』

関口尚著 集英社 <推薦者：佐藤梨緒>

友達とはどういう存在のことを指すのか。辞書で確かめてみると、“一緒に何かをしたり遊んだりして気持ちの通い合っている人。”この主人公達は本当の友達だと思う。長谷川優太、モ一次郎、姫。膝がこわれたのを言い訳に、弱い自分から逃げていた優太。彼が弱い自分に立ち向かっていく時、私は思わず力んでしまった。努力して目標に少しずつでも近づいていった3人が、格好良いと思った。モ一次郎が姫をかばってなぐられた時、モ一次郎の優しさに気づき、心がほっこりした。努力する大切さと友達の大切さをこの本に学んだので、みなさんにおすすめしたい1冊です。

『夜が来ると』

フィオナ・マクファーレン著 北田絵里子訳 早川書房 <推薦者：草川麗子>

本のタイトルに惹かれて読みだしました。すぐ引き込まれます。どんな成熟した方が書かれたのかと思いました。著者の年齢を知っておどろき、リスペクトの念を持ちました。まだ30代の女性でした。

カバーのトラの絵とタイトルとの隔たりも、読み進むうちに無くなっていました。

主人公は、海辺の家に猫2匹と一人暮らしをしている75才の女性ルース。物語は「ルースが朝の四時に目を覚ますと、ぼんやりした脳が“トラ”と言葉を発した。」という書き出しで始まります。

ルースが椅子に座って目の前の海を眺めていると、「海がそこにあるだけで、モーツァルトを聴かされた植物もかくやあらんというような、なんとも言えない癒しを感じた。」寄せては返す波の音を聞きながら、「次の大波が来たら、庭の小道の砂を掃こう。」などと、腰痛の身をかばいながら考えをめぐらせています。

こんな日常を送っているルースの前に、突然トラとヘルパーが現れ、ストーリーが進んでいきます。この本に出会えた幸せをしみじみと感じさせられた作品です。

『冷たい校舎の時は止まる』

辻村深月著 講談社 <推薦者：森田未央>

私は毎年冬にこの作品を読みたくなります。白い吐息、凍える足先、不安な気持ち、全て思い出し高3の冬に戻れるからです。

物語は大学受験を控えた高3の男女8人が、雪の日に学校に閉じ込められる場面から始まります。仲良し8人組は皆で外へ出ようと試みますが、途中であることに気づきます。

自分等の中に1人、自殺したはずの人がいる。しかし、誰もその人を思い出せない。もしかしてここはその人の心の中なのではないか。8人は互いに疑心暗鬼になる中、姿の見えない“ホスト”によって、1人ずつ人形にされてゆきます。そう、まるで復讐のように。

物語は終始雪が降っており、寒さと恐怖で何度もトイレに行きたくなります。しかし、読み始めると止めることが出来ない程の面白さと不気味さです。そして長い冬を乗り越えたと、きちんと暖かいゴールが用意されているので安心して読んで下さい。きっとあなたも高校3年生に戻ってしまいますよ。



『ゆうじょう』

村田喜代子著 新潮社<推薦者：山口真理子>

九州南の活火山・硫黄島から、全国でも5本の指に数えられるという熊本の遊所、その中でも一番格上の東雲楼に売られてきたイチが主人公である。イチは島言葉しか話せず振る舞いも粗野な野性児で、しばしば問題を引き起こす。しかし、感性豊かで、自分で考えることができる利発な娘でもある。

「じのどこがほげもした」「あたいはちいおになりもした」「しょうぎにおやはいりませぬ」と、イチが習い覚えた文字で、だが島言葉は残したまま書く日記が、そのまま目次となっている。この日記は、娼妓たちの学校である「女紅場」のお師匠さん・鐵子さんに当てて書かれるものだが、詩的ですらあり、魅力的だ。

この本は、明治30年代の遊郭の様子などが、鐵子さん、見世最高位の東雲花魁はじめ様々な境遇の娼妓たち登場人物等により、表情豊かに、時にユーモラスに描かれている。舞台となる遊郭が高級な店であり、阿漕な事はされず、娼妓もそれなりに大切にされていることから、“遊郭＝性産業＝暗いイメージ”はない。むしろ、あっけらかんとした明るささえある。イチも読み書きを覚え、世の中を知り、人間として成長していく。

しかし、金銭がからむ不満、また娼妓は牛馬使扱い（娼妓は人外の者）にされている法令を知るに及んで、折しも造船所のストライキも耳に入り、遂に80人のうち東雲さんをはじめとする35人が、店を出ていく。

この時の主人と東雲さんのやり取り「わしはお前さんに何か悪さをしたか」「よその見世のように、うちの女郎衆を酷う騙したことが一遍でもあったか」「それでもお前様は、人を売り買いしなさんした」この言葉に人間としての誇りを見た。

私は熊本出身だが、小さい時から「東雲のストライキさりとはいつらいね」という歌を何となく知っていた。「このことだったのか」と思ったのが、この本を読んだ副産物だ。

あんな情報・ こんな情報



平成26年度版

『数字で見る図書館活動 —概要と統計—』

を発行しました

『数字で見る図書館活動』は、調布市立図書館の蔵書数、貸出数などの統計を、表やグラフでわかりやすくまとめた冊子です。

また、1年間の詳細な活動記録も掲載し、カウンターからは見えにくい図書館の全体像を知っていただける内容となっています。

冊子は中央図書館5階地域資料コーナーと全分館に所蔵しています。バックナンバーは中央図書館で所蔵しています。また、図書館のホームページでも、昭和41年度の『調布市立図書館の活動報告』から平成24年度版まで掲載しています。ぜひご覧ください。

名誉市民水木しげる氏(93歳)が、
11月30日に逝去されました

『図書館だより』の表紙にイラストを寄せていただいたり、著作のご寄贈など、図書館活動にもさまざまなご協力を賜りました。

水木先生の逝去を悼み、謹んでお悔やみ申し上げます。



第44回 樟まつり — 共に生き、共に学ぶ —

図書と生涯学習団体「アカデミー愛とぴあ」では、1年間の学習の締めくくりとして、また、一般市民に生涯学習への参加の機会として、毎年2月に、「樟まつり」を共催しています。

今回のテーマは「学びは喜び」です。いずれも入場無料です。詳細は、市報1月20日号やポスター、図書館で配布するチラシ等をご覧ください。

日	場所／時間	催 事	
2月1日 (月)	たづくり12階 大会議場 午後2時～4時	時局講演会	「オリンピックと日本外交」
			池井 優 氏 (慶應義塾大学名誉教授)
2月4日 (木)	グリーンホール 小ホール 午後2時～4時	文化講演会	「人生という作文」
			下重 暁子 氏 (作家)
2月9日 (火)	たづくり12階 大会議場 午後2時～4時	文芸講演会	「平家物語—知られざる女性たちの活躍」 特別朗読: 木下順二作「平家物語による群読『知盛』より」
			嵐 圭史 氏 (「前進座」俳優)
2月11日 (木・祝)	たづくり8階 映像シアター 午後1時30分～4時	第43回 市民歌会	「選評と講話」
			選者: 雁部貞夫氏 来嶋靖生氏 小島ゆかり氏 予定
2月13日 (土)	たづくり12階 大会議場 午後2時～4時	文芸講演会	「ピース又吉・太宰治と芥川賞」
			鶴飼 哲夫 氏 (読売新聞東京本社文化部編集委員)
2月16日 (火)	たづくり12階 大会議場 午後2時～4時10分	第44回 市民句会	「選評と俳話」
			選者: 太田土男氏 棚山波朗氏 西嶋あさ子氏 坊城 俊樹氏 予定
2月18日 (木)	たづくり12階 大会議場 午後2時～4時	文芸講演会	「俳句の歴史と芭蕉」
			大輪 靖宏 氏 (上智大学名誉教授)
2月24日 (水)	たづくり12階 大会議場 午後2時～4時	歴史講演会	「真田幸村と大坂の陣」
			北川 央 氏 (大阪城天守閣館長)
2月28日 (日)	グリーンホール 大ホール 午後2時～4時10分	名画鑑賞会	「家路」
			震災後—戻れなくなってしまった家。弟の突然の帰郷。喜びも悲しみも、すべてここに あった。あの日、故郷を失い、希望をなくした家族の再生の物語。
			監督・編集: 久保田直 脚本: 青木研次 出演: 松山ケンイチ 田中裕子 安藤サクラ他 *入場券が必要です。詳細は市報ちょうふ1月20日号をご覧ください。
2月25日 (木) ～2月29日 (月)	たづくり2階 南ギャラリー 午前10時～午後6時 (初日正午～、 最終日午後5時終了)	展示の部	調布淡彩画展 (調布淡彩画の会作品発表)

雪などにより催しものを中止・変更することがあります。最新の情報は、調布市立図書館のホームページをご覧ください。

問合せ: 調布市立図書館読書推進、アカデミー愛とぴあ (調布市文化会館たづくり10階)

☎ 042-441-6328 (受付時間 午前9時から午後5時まで)

北原白秋の詠んだ深大寺

井上明枝

昭和45年秋に調布に移り住んでから年に数回は深大寺を訪れ親しんできました。北原白秋が晩年の昭和13年に深大寺に来て歌を残したことを知ったのは野田宇太郎著『東京文学散歩』第7巻・武蔵野編を読んだ時です。

「赤い鳥小鳥」「待ちぼうけ」「揺籠のうた」「からたちの花」など幼ない頃から歌っていた童謡を書いた白秋は詩人・歌人として日本語の幅を広げ豊かにしてくれた人です。「深大寺の九月」と題する歌を載せた歌集「黒檜」の巻末に白秋は次のように書いています。

「昭和12年11月、眼疾いよいよ昂じて駿河台の杏雲病院に入院して以来、同15年4月に砧の成城より杉並の阿佐ヶ谷に転住するに至る約二年有半の期間における薄明吟が之である」

深大寺を訪れたのは初秋の9月17日。黒眼鏡にステッキ姿で妻の菊子、白山春邦画伯と一緒にした。不動堂わきの不動滝の水の音を耳にして

深大寺水多ならし我が聴くに

早や涼しかる滝の音ひびく

門前の石段を登って本堂へ。庫裡の玄関前にそびえ立つ無患子の太木を仰ぎ見ながら

むくろじの実のまだあをき庫裏の前

もの申すこえの我はありつつ

寺僧の案内で庫裡から本堂へ廊下を歩き、ご本尊右脇に安置された厨子の中の白鳳仏に合掌、薄明の両眼をいっぱいに見開いて詠んだ二首

御厨子には倚像の仏坐しまして

秋さなかなり響くせせらぎ

はてしらぬ仏の笑まい面あかる

灯映りにしてみ掌の欠けたる

本堂を出て境内を歩き元三大師堂の崖下の池で

深大寺の池 水澄みたらし下照りて

紫金の鯉の影行く見れば

初秋の変わりやすい天気、突然の通り雨に会い

ここの山我が聴く方ゆ日照雨して

庫裏戸に濡るる秋海棠の花

庫裡の軒下に雨宿りして、美しいピンク色の花が



目に優しく映ったのでしょう。

翌月9日には、白秋が主宰する歌誌「多磨」の吟行会が深大寺で行われており、妻と共の探訪は下見の心積りだったのでしょうか。その後も病状の悪化する中で創作に、吟行に活躍を続けましたが、昭和17年11月2日未明、病室の窓を開かせ「新生だ」の一言を遺して死去。57歳でした。

深大寺境内には句碑が11基、歌碑が4基あります。山門を入って左側に清水比庵「門前の蕎麦はうましと誰もいふ この環境のみほとけありがたや」、元三大師堂石段下に高浜虚子「遠山に日の当りたる枯野哉」、中村草田男「万緑の中や吾子の齒生え初むる」など。延命観音に芭蕉の「象潟や雨に西施が各歎の花」があります。白秋の碑はありませんが庫裡前の無患子の木（写真）は秋に実が熟し黒く堅い核は羽子板の羽根玉になります。白秋の世界の象徴かもしれません。

なお「深大寺散策マップ」（調布市観光協会）には、句碑・歌碑を巡るコースが詳しく紹介されており、深大寺観光案内所で手に入ります。

刊行物番号

2015-171

図書館だより 第238号

平成27年12月25日発行 [市内印刷]

発行 調布市立図書館

〒182-0026 東京都調布市小島町2-33-1

TEL 042-441-6181

<http://www.lib.city.chofu.tokyo.jp/>